



齋正機展

ざんしぼっけい
～残滓牧景第三章

“拝啓 吾妻小富士様”

●東京展

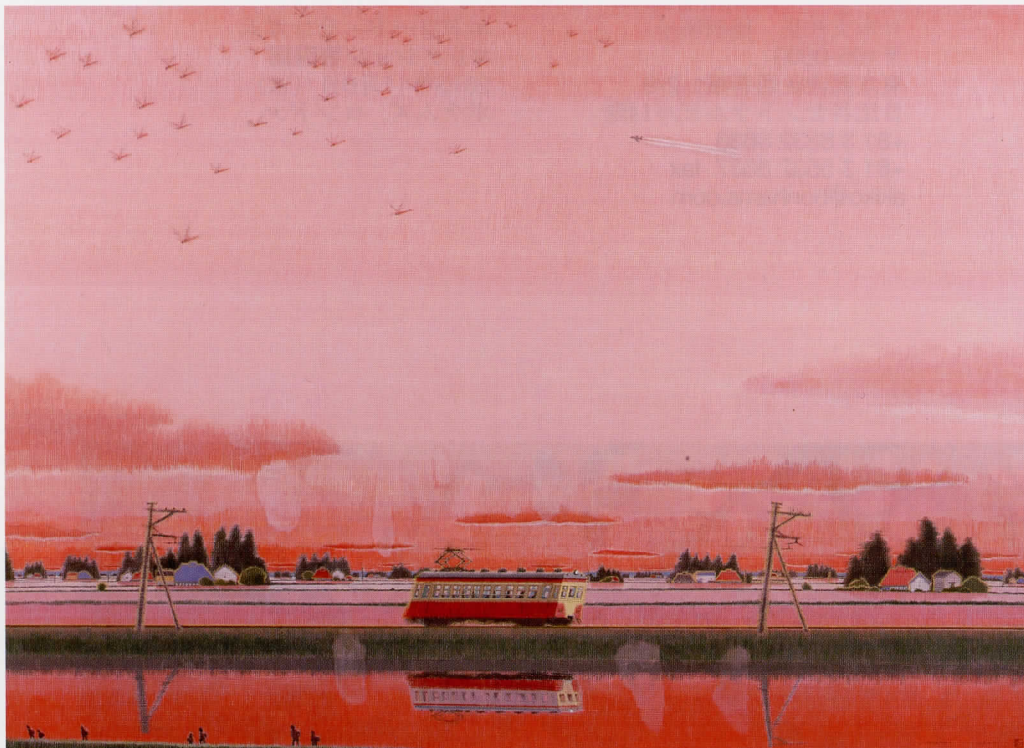
【会期】 10月8日(火)～10月19日(土)
日曜休廊
【会場】 日動画廊 本店
中央区銀座5-3-16
☎03(3571)2553
※ギャラリートーク
10月12日(土)14時～

●名古屋展

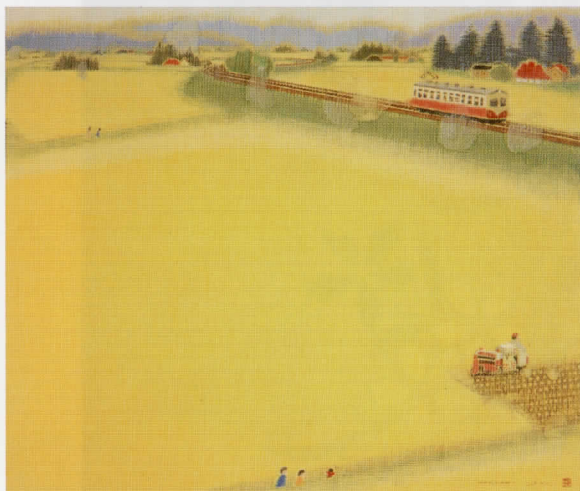
【会期】 10月24日(木)～11月2日(土)
【会場】 日動画廊 名古屋店
名古屋市中区錦2-19-19
☎052(221)1311
※ギャラリートーク
10月26日(土)15時～

さい・まさき

1966年福島県生まれ。94年東京藝術大学大学院修了。
2000年三深日本画賞展佳作賞、信州高遠の四季展奨励賞、03年昭会展昭和会賞。個展・グループ展多数。



「紅イ日」110号変形



「黄金シュタン」10号F



「トンボノ風」20号P

心のスクリーン、あるいは物語

齋正機の描く風景から、深い郷愁の感情が湧き起こるのが不思議だ。

齋の描くモチーフは機関車、田んぼ、漆喰の壁、赤とんぼ……。いずれもノスタルジックなイメージを誘うものだが、それらが配置される、画面という空間に秘密がある。

齋の絵は、現実をリアルに描いているように一見見えるが、実は構築した世界である。心のスクリーンと絵のスクリーンが重なるように表現されている。創造された絵画の持つ力なのである。空間の力と言いつてもいい。画家のパッション、心、思考、価値観、様々な要素がそれを真実なものにする。物語を作ること、人間にとって必要不可欠なことである。それを、よく言われる単なるフィクションという言葉に換言するのは軽薄であって、齋正機の作品をそのように軽いものとして見てはいけない。おなじような軽薄なリアリズムとも異なる、真実の心の物語が描かれている。だからこそ齋の作品は沢山のファンを呼ぶのである。必然的にそこにはマチエールが生まれる。心の壁がつくる手触りである。記憶も生まれる。色彩も生まれる。それら全体が、鑑賞者の心に染み通るように話しかけてくるのである。

110号から小品まで約30点、加えて葉書サイズのドロ잉が100点展示される。昭和会賞を受賞して、2006年に個展を開催したが、それ以来の日動画廊での個展となる。

(高山淳)